## P2-048

# 心疾患を有する患者における医療機関 からの紹介状に関する実態調査

野村 良太、仲野 和彦

大阪大学 大学院歯学研究科 小児歯科学教室

## P2-049

# 造血幹細胞移植患者における口腔内細菌叢 の変化

吉田 衣里1、森川 優子2、高島 由紀子1、 森本 節代1、平野 慶子2、仲野 道代1

一岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 小児歯科学分野、 2岡山大学病院 小児歯科

#### 【緒言】

感染性心内膜炎は、口腔レンサ球菌が主要な原因菌である ことから、歯科領域で最もよく知られている全身疾患の一 つである。心疾患を有する患者に観血的な歯科治療を行う 際には、抗生物質の術前投与が推奨されている。感染性心 内膜炎は発症すると死に至ることもある疾患であるにもか かわらず、発症頻度が稀であるためにそれらの対応に関す る報告は少ない。今回、我々は医療機関から紹介を受けた 心疾患患者の紹介状を用いた実態調査を行ったので報告す

#### 【対象と方法】

本研究は、大阪大学大学院歯学研究科倫理委員会の承認の もとに行った。本学歯学部附属病院小児歯科に過去5年間に 受診した患者のうち、電子カルテ上に心疾患関連の医療機 関からの紹介状が保管されていた患者を抽出した。これら の患者について、心疾患の種類および歯科治療を行うにあ たり推奨された抗生物質の術前投与法等に関して分析した。

#### 【結果】

電子カルテ上から41症例の紹介状が抽出された。これらの 患者は0歳~27歳(平均年齢7.3±5.6歳)で、男性が19名、 女性が22名であった。心疾患の種類としては、心室中隔欠 損が最も多く17名、次いで心房中隔欠損が7名、フォンタン 手術後が6名、大動脈弁狭窄症および大動脈弁閉鎖不全症が それぞれ5名であった。感染性心内膜炎発症予防のための抗 生物質の術前投与法としては、「処置内容にかかわらず術前 投与を推奨」という内容のものが19症例、「抜歯等の観血 処置に限り必要」が9症例、「ガイドラインに準じた対応を 推奨」が9症例(うち、1997年の米国のガイドラインに準 じたものが8症例、2008年の小児循環器学会に準じたもの が1症例)であった。一方で、「術前投与の必要がない」と いう症例は4症例にとどまった。また、具体的な抗生物質の 内容に関して記載のあった10症例全てにおいて、体重1kg あたり50mg(最大2.0g)のアモキシシリンを処置1時間前 に投薬することが推奨されていた。全ての症例において、 歯科治療後に問題は認められなかった。

### 【考察】

当科に紹介されたほとんどの症例において、各種歯科処置 に際して抗生物質の術前投与が求められていた。歯科処置 には、抜歯や歯石除去等の侵襲的な観血処置もあれば、充 填処置などの侵襲を伴わない軽微な処置も存在する。今後 は、より適切な抗生物質の術前投与法を検討していくため に、医科と歯科との連係を強化し互いの情報を共有してい く必要があると思われる。

#### 【目的】

造血幹細胞移植を行っている患者においては、好中球の低 下に伴う感染症の予防のために様々な抗生物質が投与され ることにより、口腔内の細菌叢の変化が起こっている可能 性が高いといわれている。結果として、重度の歯肉炎が発 生することが多くみられる。歯肉炎は、小児に認められる 歯周組織疾患のうち最も多いものであり、原因としては口 腔内のプラーク中の細菌が挙げられる。本研究では、我々 は歯肉炎の原因菌を明らかにするために造血幹細胞移植前 後の口腔内細菌叢の変化を調べたのでこれを報告する。

本研究は、岡山大学生命倫理審査委員会の承認を受け行 なった。保護者の同意が得られた3名の患児(10.5歳~ 13.7歳)の口腔内診査を行い、上下顎犬歯より縁上プラー クを採取した。採取したプラークより通法を用いて染色体 DNAを抽出し、それらをテンプレートとし、6種類の口腔レ ンサ球菌と10種類の歯周病原細菌の存在をPolymerase-Chain Reaction (PCR) 法を用いて行った。

### 【結果】

口腔レンサ球菌は、1サンプルのみで検出された。歯周病原 細菌においては、造血幹細胞移植後に最も検出されたもの は、Capnocytophaga sputigenaであり、続いてPrevotella nigrescensであった。一方で、Porphyromonas gingivalis、 Tannerella forsythia、Treponema denticola、 お よ び Actinobacillus actinomycetemcomitansは全てのサンプルに おいて検出されなかった。

#### 【考察】

今回の結果から、小児において歯周病原細菌の存在は、歯 肉炎の進行にとって重要な因子であると考えられる。さら に、通常、小児で歯周病原細菌が検出されることは稀であ ることから全身状態により、口腔内の細菌叢が変化するこ とで、歯周病原細菌の増加が起こっていると考えられる。 そのため、継続的な口腔内の清掃等の歯科的管理を行い、 歯周病原細菌の増加を防ぐことが、移植を受ける小児にお いて特に重要であると思われる。